

ベトナム・ハノイの紙銭

——比較研究の試み——

Vietnamese Votive Money

—A Comparative Study—

芹澤 知広

SERIZAWA Satohiro

要 旨

東アジアの民俗比較において取り上げられることの少なかったベトナムの事例を取り上げて、物質文化の比較研究を試みる。今日のベトナムの首都ハノイは、1010年から、中部のフエに王宮が置かれた1802年まで、ベトナムの王都であった。中国との国境にも近く、中国文化の影響を今もなお色濃く残している。本稿で扱う紙銭（金銭を模倣した紙製祭祀用品）も、中国の影響を受けてベトナムで木版印刷が行われるようになった12世紀にまでさかのぼる歴史をもつ。しかしながら、今日ハノイでは、台湾や香港の漢族の紙銭とは異なる紙銭が存在し、その使用方法も異なる。それでは、これらの紙銭は、1954年の南北分離や1986年の経済開放（ドイモイ政策）など、20世紀後半のベトナムの歴史的な過程のなかで、どのように生まれてきたのであろうか。この問題を紙銭生産に特化した村落、A村（仮称）に焦点をあてて考察する。

今日のハノイでは、A村で生産されている4種類の紙銭、すなわち、銭型の紙銭、「500,000」を額面とした紙銭、米ドル札を模した紙銭、「ヴァン・ラー」という金紙の紙銭が、セットとして使用されている。このセットは、捧げる対象が神仏であっても祖先であっても等しく用いられる。これらの紙銭には、その出現を促した条件をそれぞれに考えることができる。銭型を並べた紙銭は、質の悪いリサイクル紙に印刷するのにふさわしい。「500,000」の額面の紙銭は、A村で1970年代に始まったデザインを基にしており、現実の紙幣をモデルとしていないためベトナム政府からも認められている。米ドル札を模した紙銭は、現実の紙幣にいくら似せたとしてもベトナム政府からの干渉を受けない。そして「ヴァン・ラー」は、ベトナム北部、とくに沿岸部の漁民に人気があり、A村がその生産に長けていたため、祖先祭祀にも用いられるようになったと考えられる。

【キーワード】 ベトナム、ハノイ、紙製祭祀用品、紙銭、比較研究

1. 序論

「紙銭」とは、日本の中国研究者のあいだでよく知られてきた、金銭の模造品としての紙製祭祀用品のことである。この紙銭がベトナムにもあることについて、日本のベトナム研究者はよく知っ

ている。

例えば、1990年代にベトナムの首都、ハノイの郊外にある潮曲村で調査を行った末成道男は、アメリカの人類学者、ジェームズ・ワトソンがあげた中国の漢族の葬礼の特徴と、潮曲村の葬礼の事例とを比較して、「儀礼化された金銭の使用は顕著ではない」と指摘しつつも、「食品、冥紙、練香の供えも〔漢族と〕同様に行われる」と述べ、ベトナム北部の葬礼で中国と同じように紙銭が使われることに注意を促している〔末成 1998:372-373〕。この潮曲村の研究は、映像資料と民族誌的分析とを結びつける野心的な試みであり、モノグラフ本篇とは別に付けられた映像から、村で紙銭が使われる様子を動画で見ることができる。夏の行事である「出夏」や「中元」、冬の行事である「年越し」のなかで、「vang la」と言われる「金紙」〔本稿の第4章で紹介するように、赤色の地の長方形の紙の真ん中に金色が長方形のかたちで塗られたもの〕が見てとれる〔末成 1998:CD-ROM〕。

また、末成道男は、ベトナムを中心に東アジアの文化交流を論じる別稿で、ベトナムの紙銭と沖縄の紙銭との類似を指摘している〔末成 2003:203-204〕。ここで話題となっている紙銭は、上述の金紙ではなく、紙に銭型を並べた別の紙銭である。

これらの先行研究から、現在ハノイ近郊の農村で儀礼に紙銭が用いられていること、そしてその紙銭に数種類のあることがわかる。それでは村人が手に取る紙銭は、どのように作られたものなのであろうか。また、数種類ある紙銭には、お互いにどのような特徴があるのであろうか。しかしながら、管見によれば、ベトナム民間版画の産地として有名なバクニン省ドンホー村の紙製祭祀用品生産を扱った川上崇の論文を除いて〔川上 2001〕、ベトナムの紙製祭祀用品に焦点をあてた日本人の研究はなく、紙銭についてのまとまった論考は今までない。

本稿は、上述した末成道男の比較研究の視点を継承し、ハノイでの筆者の見聞を、主として台湾・香港の漢族の紙銭の事例に照らしながら、ベトナムの紙銭、そのものの歴史的な過程をたどる試みである。第2章で、日本人による紙銭研究の起源を説明し、第3章で日本本土の周辺にある南西諸島と朝鮮半島の事例に触れる。そして、第4章でベトナム・ハノイの紙銭を具体的に紹介する。そのことによって、ベトナムの紙銭が、中国から伝わったかたちのまま、不変に存在してきたのではなく、20世紀後半のベトナム国家の政治的・経済的過程や、紙銭生産技術の発展を経て、今の姿に変化してきたということが明らかになる。

紙銭は特異な物質文化である。紙銭を祭祀に使う信仰のなかでは、紙銭は燃やされることで、いわば「あの世に送金」され、あの世の神や祖先がそれを用いることが可能になる。この世界観のなかであの世は、この世と同じく「カネが物を言う」社会であり、この世の貨幣を模造した貨幣があので流通していると考えられている。そのため、紙銭は、この世とあの世をつなぐ物質文化として、きわめて興味深い研究対象であるが、最終的に燃やされるため、通常はこの世に残らない。

紙銭を調査するうえでは、その最終消費の前段階にあたる、生産や流通の現場で、その姿を確認するというのが通常の方法である。本稿でも主としてハノイの生産、流通、消費の現場での観察に基づいて論じる。

なお、日本で紙銭を研究するうえでは、資料として日本の博物館に残された紙銭を参考にすることも可能ではあるが、日本の博物館に収蔵される紙銭の多くは中国製の紙銭であり、管見の限りではベトナムの紙銭はない。名古屋大学博物館には浅見汎コレクションと伊藤三朗コレクションの紙銭が590点あるが、いずれも雲南省などの中国本土の紙銭である〔佐藤純子他 2010〕。駒澤大学禅文化歴史博物館に収められている窪徳忠が収集した紙銭110点は、主として台湾や中国本土、日本（沖縄、神戸）で集められたもので、ベトナムの紙銭は含まれていない〔駒澤大学禅文化歴史

博物館 2011]。また、国立民族学博物館のホームページ上で公開されている「標本資料目録データベース」で「紙銭」を検索すると、328点の紙銭の情報があらわれるが（2012年9月27日現在、紙銭そのもの以外にも紙銭製作の道具も含まれる）、その収集地は、日本（沖縄）、中国、マレーシア、タイ、フィリピン、韓国で、ベトナムは出てこない。マラッカで収集されたマレーシアの紙銭は134点あり、後述する韓国の紙銭は105点あって、国立民族学博物館は紙銭の比較研究のための貴重な資料を所蔵していると考えられるが、ベトナムの紙銭が収蔵品として登録されることはなかったと思われる[国立民族学博物館 2012]。

筆者によるベトナムの紙銭についての現地調査は、2010年3月、2011年2月・3月、2011年7月・8月、2012年2月、2012年7月に、それぞれ短期間でハノイへ赴いた時に行った。滞在時間としてはほんのわずかであり、集めた情報も少ない。しかしながら、上述したような日本の紙銭研究の現状に鑑みると、拙稿を公刊し、ベトナムの紙銭についての情報を提示することには、いくらかは意義があると考えている。

2. 「紙銭」への日本人のまなざし

日本語では一般に「紙銭」という言葉に、上述した中国研究の文脈での紙銭とは少し異なる意味が与えられている。『日本国語大辞典』によると、日本語の「紙銭」は、「紙を銭のかたちにしたもの。神をまつときに用いられ、銭切の幣ともいわれた。また、棺に入れるものを瘞銭（えいせん）という。六道銭。ぜにがた。かみぜに。」と説明されている[日本大辞典刊行会編 1980:550]。

日本においても儀礼のなかで金銭の紙製模造品が使われたことがわかる。東野治之によれば、紙製の「銭形」としての紙銭は、平安時代に成立した『延喜式』に、陰陽寮の祭りで使用されたことの記載があり、その後の時代にも引き続き使用された[東野 2006:29]。しかし、この使用は限定的なものであり、中国やベトナムのように、一般の死者祭祀の一連の儀礼のなかで、何度も大量の紙製用品が燃やされるというようなことが日本本土にはなかった。

そのため、中国文化のなかでの「紙銭」が、日本の「紙銭」とは異なる特別なものであることについて、日本人研究者は、中国文化に直接触れるようになった明治時代から注目して研究を始めていた。一般の日本人が一般の中国人（漢族）と日常的に接するようになる機会は、1895年の下関条約に始まる台湾領有によってもたらされた。日本が植民地の台湾を統治するうえで、その地の原住民の文化を理解するの必要があり、1901年には、台湾総督府民政部法務課内に設けられた台湾慣習研究会が、『台湾慣習記事』という研究雑誌を創刊している。この『台湾慣習記事』は、台湾の民俗について紹介する、当時の重要な雑誌のひとつであるが、1906年からは「懸賞文」を募集するようになった。その第1回のテーマは「生蕃人の国法上の位地」であり、その第2回のテーマが「金銀紙の種類及び製法」となっている。なお「金銀紙」は、後述するように「紙銭」を総称するカテゴリーのひとつである。

『台湾慣習記事』が懸賞文募集を始めるにあたっては、創刊後の6年間のあいだに、漢族の慣習についての調査研究が進んだが、「漢族以外尚ほ十萬の生蕃」がいて、その統治が「一大難事」であることが懸賞新設の理由として謳われている[台湾慣習研究会 1906:3]。そのため、第1回は、漢族ではなく台湾先住民（高山族）を対象にしたテーマが選ばれた。それでは、第2回に紙銭がテーマに選ばれたことには、どのような背景があるのだろうか。

『台湾慣習記事』の創刊後まもなく、すでに紙銭について扱った論考は掲載されていた。藤田捨

次郎「爆竹と金銀紙」がそれで、その結論部分は次のような言葉でまとめられている。

台島周年金銀紙の費消高は従前六十萬圓前後にして其大部分は対岸より輸入したりとの説あり、果して然りとせば爆竹の費消高を合せ百萬圓以上に及びしならむ、我税関を經由せる明治三十年より三十二年に至る三年間の輸入平均額は左の如し〔途中省略〕何れにしても台島年々巨萬の金は全く迷信より生せる風習の為に真の烟に化しつゝある也。〔藤田 1901:64〕

また、懸賞文で「一等賞」を授与された西川義祐の「金銀紙の種類及び製法」の序論にも、次のような言葉を見ることができる。

艋舺の金銀紙製造業某の言に依れば、一箇年の売上額二千圓ありと、今若し如斯紙店全島をつうじて五百戸ありとせば、明らかに一百万圓は毎年此冗費に消え行くものなり。されば全島民は五箇年にて一台湾銀行の資本金を煙に為すと等しければ、若し此の冗費を転じて貯蓄せんか五十年間毎に十箇の台湾銀行が増設さるゝを見ん。實に寒心すべき次第ならずや。〔西川 1906:289〕

これらの記述から、当時の日本人が台湾漢族の紙銭の消費に国際貿易収支上の関心を払っていたことが想像できる。「烟」や「煙」という言葉からは、このころの世界的なアヘン貿易と植民地経営との関係をも思わせるが、買われた紙銭が大量に灰となって消えていく様子を目の当たりにした本土の日本人の率直な感想と解するのが自然であろう。大量に紙銭を買うこともなく、それを燃やすこともない本土の日本人には、中国民俗のなかの紙銭は、きわめて特殊なものとして映り、現実の経済的利益獲得を阻害する迷信であるととらえられた。1926年に台湾を訪れた澁澤敬三も、紙銭の材料の消費額に言及し、「内地」にはなく、「琉球」には存在する紙銭を燃やす慣習の、比較研究に興味を示している〔澁澤 1992:34-36〕。

3. 南西諸島と朝鮮半島における紙銭

1) 沖縄の紙銭

歴史的に中国から多くの影響を受けてきた沖縄県を中心にした南西諸島は、紙銭についても中国文化に近い文化をもっている。

窪徳忠の研究によれば、南西諸島の紙銭は、「ウチガミ」「ウチカビ」「ウチンガミ」と呼ばれ、福州から輸入された唐紙を買い、自宅で自分たちの手で銭型を「打つ」というのが、かつての製造方法であったという〔窪 1997:82〕。

市販されているものも含め、今日沖縄県で見る紙銭は、粗末な黄土色の紙に「穴あき銭」のかたちが押されたもの、一種類である。かつて福建省福州から輸入された唐紙が、この紙質や色彩をもっていたのかどうかはわからない。後述するベトナムの紙銭のなかにも、「穴あき銭」を象ったものには黄色い紙を使っている。前述の西川義祐の論文でも、台湾の金銀紙の原料として福州から来る「粗紙」が多いことが指摘されている〔西川 1906:293〕。

沖縄は、福州と歴史的に深いつながりがあったため、福州から原料の紙が来たことは驚くにはあたらなないが、植民地時代の台湾においても、福州が宗教文化の中心地であった。台湾の慧巖法師の研究によると、19世紀半ばから1924年までのあいだに、台湾の中心的な仏教寺院である台南の開元寺の歴代住持は、わざわざ福州へと渡り、鼓山湧泉寺で受戒した〔慧巖法師 2003:252〕。な

お台湾では、金銀紙そのものも、福州をはじめとする福建省から製品が輸入されていた [西川 1906:293]。

窪徳忠は、那覇や首里で、祖先の祭りを総称して、「紙あぶり」を意味する「カビアンジ」や「カミアンジ」という言葉を使うことに着目し、廟に参詣することを「焼金」（金銀紙を焼く）と表現する台湾との共通性を見ている。宗教的な儀礼に紙銭を燃やすということが、南西諸島と台湾の漢族社会、さらには中国本土には共通している。

しかし、使われる紙銭の種類は、南西諸島と台湾では異なる。台湾を含め、漢族の社会では一般に、神に対して用いられる「金紙」と、祖先に対して用いられる「銀紙」とを区別する。南西諸島の「ウチガミ」は、後述するベトナムの事例を参考にして判断すると、黄土色の紙を使っていることに意味があり、「黄金」を示した「金紙」であると考えられるが、いっぽうで、「金紙」「銀紙」とは別のカテゴリーの紙銭とも考えられる。曾景來の『台湾宗教と迷信陋習』では、金銀紙以外で、金属で鑄造された古銭を表して、紙に銭型を印したのものや、銭を糸で通したものを波線で見せたものを、狭義の「紙銭」としている [曾 1938:196]。

また台湾の紙銭研究者、張益銘がカラー写真で台湾の紙銭を紹介した『金銀紙の秘密』では、「ウチガミ」に近いものは、狭義の「紙銭」のなかの、さらに狭義の「紙銭」として分類されている [張 2006:157]。

なお、香港は台湾に比べて紙銭の種類が極端に少ないが、現在香港で見えるもののなかで、「ウチガミ」に近いものには、「溪銭」というものがある [可児 2004:221-222; 瀬川 1987:97]。

2) 韓国の紙銭

それでは、南西諸島と同様、中国と日本に隣接する朝鮮半島では紙銭はどのように使われているのであろうか。

日本の文化人類学・民俗学の韓国研究では、儒教の伝統が強調される祖先祭祀や、民間信仰のシャーマニズムに焦点が当てられることが多く、そのなかでは紙銭に焦点を当てた研究を筆者は見つけることができなかった。

しかし、2012年現在、国立民族学博物館の常設展示には、韓国の紙銭が展示されている。「祈願用セット ソウル市 韓国」と題された展示物には、右から左に「冥府銭七百二十貫也」と漢字で上に書かれ、その下に銭型が並ぶ、白地に赤色で印刷された紙銭、中央に左から右に「壹萬圓」という漢字が書かれた現実の紙幣を模したカラー印刷の紙銭、そして、同じく額面は「10000」で現実の紙幣を模しているが、漢字が使われていない2色刷りの紙銭が、それぞれ並べられている。この展示の解説の表示には次のように書かれている。

開眼供養などの寺院行事や、信者が祈願する儀式などに使う用具。かつては僧侶の手作りだったが、セット商品として売られている。護符は手書きから印刷されるようになり、あの世の靈魂に送る紙銭も地蔵銀行券に変わった。

このことから朝鮮半島では、仏教寺院や仏教僧と強く結びついて紙銭が作られ、用いられてきたこと、そして、銭型を押した紙銭が古い形で、紙幣を模した紙銭が新しいものであることがうかがえる。

4. ベトナムにおける紙銭

1) 東アジアのなかのベトナム

前章までで紹介してきたように、東アジアの民俗を比較する場合、日本（南西諸島を含む）、朝鮮半島（韓国）、中国（中華人民共和国、台湾）を対象にして、3地域の比較を行うことが今までは多かった。

そこで本稿では、今まで日本の研究が手薄であったベトナムの事例について紹介し、東アジアの比較研究のなかにベトナムを取り入れることを試みたい。

上述したように、日本の文化人類学者・民俗学者によるベトナムでの実地調査は、この20年間のあいだにかなりの蓄積があるが〔末成編 2008〕、紙銭そのものに焦点をあてた研究は未だ出ていない。また外国の研究では、イギリスで活躍する人類学者のホーニック・クォンが、ベトナム中部を調査地にして、死者祭祀と紙銭の消費についての興味深い論文を書いているが、物質文化としての紙銭を中心には論じていない〔Kwon 2007〕。

本稿が主たる調査地としているのは、ベトナムの首都ハノイである。中越国境に近く、李朝の都に1010年になって以来、1802年に阮朝が都を中部のフエに置くまで、ハノイは長くベトナムの王都であったという歴史をもつ。

ベトナムの歴代王朝は、中国からの独立後も中国の王朝をモデルに国づくりを行ったため、漢字、儒教、仏教（大乘仏教）など、社会のシステムや宗教の観念には、中国の影響が今なお大きく残されている。

初期の時代に、日本の南西諸島の場合のように、中国から紙を輸入することがあったのかどうかはわからないが、中国から来た技術者が土着のベトナム人に技術を伝えることで、今日ベトナム北部で名高い工芸村の基礎がつくられるようになったと考えられている。陳荊和が、P. グルーの調査を踏まえて述べているところでは、陶器、笠、蓑、紙などの日用品の生産を行う村落が、1930年代においてもハノイの都市部の外側に広がっていた〔陳 1970:9〕。

ベトナムの主要民族である「ベト族」は、「キン（京）族」とも言われ、今日のベトナムにあたる場所に住んでいた民族のうち、中国文化を受容して都市的な生活習慣を受け入れた人々に起源する。ハノイの紙銭は、自家製品ではなく市場に流通する商品であり、王都として町がつくられ、周囲の村落の工芸品が町の市場で売られ、都会的な生活様式が普及するとともに、紙銭の使用が浸透していったのではないかと考えられる。

川上崇は、近年のベトナムの歴史研究に依拠して、12世紀ころには、ベトナムでも木版印刷が行われていたことを書いている〔川上 2001:53〕。いっぽう陳荊和は、ファン・ザーベンの『越南手工芸発展史初稿』に依拠して、15世紀の中葉に、梁汝学がベトナムから中国へ使節として渡り、印刷の技術を覚えて帰国するまでは、一切の木版印刷は中国の職人にしかできなかつたと記している〔陳 1970:8-9〕。

また、川上が調査をしたドンホー村と同じくバクニン省にあって紙製祭祀用品を製作する村、チュオンサー村で調査をしたグエン・ティ・ヒエンは、村人が次のような伝説を語ったことを書いている。13世紀に中国へ朝貢するベトナムの大使が旅行中、中国人が死者に紙製祭祀用品を供えるのを見て、自身の母親の命日に供えるための紙製祭祀用品の製作をベトナム人に命じた。その時から、ベトナム人は紙製祭祀用品を使うようになった〔Nguyen 2006:129〕。

紙銭は、現実の貨幣や金銀を模倣しており、あの世で貨幣や金銀の代わりに流通すると考えられ

ている、きわめて象徴性の高い物質文化である。そのため、現実の貨幣経済が十分に浸透した社会になって初めて生まれる信仰用具であると考えることが自然であろう。

伝統的なベトナム紙銭の生産、流通、消費のスタイルは、「ドンホー版画」などのハノイの近郊の工芸村が生産する民間版画に近似している。ベトナムで作られた紙を使い、版木を彫り、印刷して市場へ出す。さらにベトナムの民間版画のデザインには絵だけではなく漢字が添えられているものもあり、そのモチーフにも中国の有名な版画産地の作品と共通するものがある。田所政江の研究によると、ドンホー版画の代表的な図様として有名な「鼠の嫁入り」も、その祖形は中国湖南省の隆回灘頭鎮の版画の図様をモデルにしている〔田所 2008:57、78、92〕。

これらのことから考えると、ベトナムの紙銭は、明らかに中国文化の影響下で生まれ、12世紀から15世紀のあいだに都市的な生活様式が普及するにつれて浸透していった物質文化と考えられる。

2) ベトナム紙銭研究の今日的意義

今日のベトナムの文脈では、以下のような、いくつかの興味深い動きが、紙銭の生産、流通、消費の現場のなかで並行して起きている。

1つには、中国文化の影響力を脱して近代国民国家形成を目指した結果、現在のベトナムでは、ベトナム語のアルファベット表記が普及し、漢字の読み書きのできる住民がほとんどいないにもかかわらず、看板など、屋外・屋内の装飾品や縁起物に漢字をあしらったものが、近年になって多く見られるようになったこと。これは、歴史上長く中国文化が浸透してきたことに加え、最近になって中国製品の流入とともに、その使用を促すような生活スタイルが普及したためと思われる。中国の縁起物を専門に扱う「風水」の専門店もハノイにはある。

2つには、安価な中国製品が大量に輸入されて消費されているいっぽうで、伝統的な工芸品を生産してきた村落に注目が集まるようになってきたこと。近年のユネスコによる無形遺産の重視や、外貨獲得のためのベトナム国家による外国人観光客誘致とともに、ハノイ近郊の工芸村に注目が集まっている。日本人に有名な工芸村は、陶芸のバッチャン村であるが、他にも様々な村が外国人向けの観光ルートのなかで紹介されている〔Fanchette and Stedman 2009; Luu 2010〕。

3つには、社会主義国家のなかで、祖先や神のために燃やされる紙銭は「迷信」として位置づけられる可能性が大いにあるにもかかわらず、近年のベトナムの宗教復興の動きのなかで一般大衆の紙銭への需要が大きく増加し、市中でのその使用が公然と行われるようになってきていること。大西和彦の研究によると、ベトナムでは、南北統一直前の1975年1月15日に出された冠婚葬祭の簡素化に関する規定の中に「迷信異端の排除」の条項があり、紙製祭祀用品の売買は厳しく禁止された〔大西 1995:218-219〕。しかし後述するように、今以上に「迷信撲滅」を推進する政府の圧力が強かったこの1970年代でさえ、紙銭はなくならなかった。むしろ当時、戦争で多くの家族を亡くしたベトナム北部の住民にとって、家族の亡骸を探したり、供養したりする需要は現在まで大いにあり、それが今日の宗教復興ブームを加速させていると考えられる。

4つには、伝統的な紙銭生産が衰退し、中国からの輸入品によってベトナム製の紙銭は駆逐されていくという仮定もできるが、調査のなかで聞くことのできた実際の経緯はそれほど単純ではなく、村落内の家内工業や、村落外の原料流通のシステムとも関係して、現在も紙銭の生産に特化した村落が存在すること。このハノイ市内の紙銭産地であるA村(仮名)の事例を次節以下で紹介する。また、筆者は詳しい情報をまだ何も得ていないが、ハノイの郊外には、台湾の企業が、台湾向けの紙銭を製造するために建てた工場もあるようだ。

なお、仏教儀礼と紙銭との関係について、ベトナム南部の宗教を研究するドー・ティエンは、1930年代のベトナム北部の仏教雑誌から、興味深いやりとりを紹介している。当時の北部における仏教改革派のリーダーであったチーハイ師は、紙製祭祀用品の使用を知性的ではないとして批判した。それに対し、紙製祭祀用品の生産者は、全ての仏教僧が紙製祭祀用品を使っているし、李朝や陳朝の王朝もその使用を禁止したことはなかったと反論する [Do 2007:169]。なお、李朝・陳朝の時代とは11世紀から15世紀にかけての時代にあたり、ちょうど紙製祭祀用品の生産、流通、消費がベトナムで始まった時期に重なる。

そして、この生産者へのさらなる反論を試みる論者は、紙製祭祀用品を製作するための材料の70パーセントが輸入されていることを指摘し、紙自体に需要があるから、紙製品ではなく紙自体を製作したほうが経済的ではないかと論じている [Do 2007:169-170]。このことから、1930年代のベトナムにおいても、台湾領有直後の日本人による批判のような、紙銭に対する国際収支の視点からの批判が形成されていたこと、そして同時に、当時のベトナム北部で宗教と紙製用品が強く結びついており、その原料が輸入されていたことがわかる。

この1930年代にすでに現れていた紙銭使用に対する批判的な見方が、ベトナム内部から今後も再び起きてくるのかどうかということも追究すべき興味深い論点になろう。筆者の知るのはベトナム北部ではなく南部の事例であるが、あるホーチミン市の仏教寺院は、住職の方針で、線香や紙製祭祀用品を境内で燃やすことを一切禁止している。

このようにベトナム紙銭の生産、流通、消費の問題は、村落生活から国際関係に至る様々な局面にわたって、ベトナム文化史上の興味深い問題とつながっている。

3) ベトナム紙銭の分類

紙銭にあたるベトナム語には、「*tiền giấy*」(ティエン・ザイ「紙の銭」)、「*tiền âm phủ*」(ティエン・ナム・フー「陰府の銭」)、「*tiền địa phủ*」(ティエン・ディア・フー「地府の銭」)、「*tiền vàng*」(ティエン・ヴァン「金色の銭」)あるいは「黄色の銭」、などがある(ベトナム語は形容詞が後ろから係る)。

また、A村のB氏とC氏(ともに1943年生まれの男性)から聞いた話を総合すると、紙銭には以下のような種類がある。

まず、「*mả*」(マー)という紙製祭祀用品がある。ハノイ旧市街で紙製品を売っている通りを「*hàng mả*」(ハン・マー)と言うが、その「*mả*」であり、『詳解ベトナム語辞典』では「冥器」とある [川本 2011:984]。葬儀など、祖先祭祀の儀礼のなかで燃やされる大きな紙製の模型、中国語で言うところの「紙紮」がこれにあたる。A村でも少しはこの「マー」を生産していたようであるが、特産品ではなかった。ドンホー版画の産地として有名なバクニン省のドンホー村は、現在でも「マー」を作っている。

そして、この「マー」ではなく、A村が長く生産してきたものは、「*giấy vàng mả*」(ザイ・ヴァン・マー)である。いわば「冥器(明器)としての金の紙」で、沖縄の「ウチガミ」に似た紙銭である。

興味深いことに、これをB氏もC氏も、「*giấy tiền*」(ザイ・ティエン「銭の紙」)と言っていた。上述した台湾の紙銭についての先行研究による説明と同じように、この銭型を黄色い紙に印刻した紙銭こそが、「紙銭のなかの紙銭」であるとベトナムでも認識されていることがうかがえる。A村で紙銭生産の工場を家のなかに設けて切り盛りしているD女史も、このかたちの紙銭がもっとも古いかたちであると説明していた。またB氏は、この紙銭を、「*tiền vàng*」(ティエン・ヴァン)や

「bạc âm phủ」(バック・アム・フー「陰府の金」)とも言っていた。「bạc」の第一の意味は、元素の「銀」のことで、「銀色の」「銀白色の」という意味もあるが、ここでは「金(カネ)」や「金銭」を指しているものと想像される[川本 2011:33]。

B氏によると、1954年の南北分離以前、このA村は全戸が紙銭生産に携わっていたという。当時、「ウチガミ」風の紙銭のほかには、「thoi vàng」(トイー・ヴァン「金の延べ棒」)と呼ばれる立体的な紙銭も作っていた。「thoi」とは、名詞の前に付いて、小さく細長い物体を表す「類別詞」である[川本 2011:1637]。

B氏によると、トイー・ヴァンの作り方は、次のようになる。ハノイ旧市街の「hàng bô」(ハン・ポー)通りから、「ポーリア」[フランス語の形容詞「poli」(磨かれた、光沢のある)に由来する]と呼ばれる薄くて大きな白い紙を買ってくる。そして、それを黄色く染める。別に、竹ひごを組み合わせて、3角柱のかたちを作り、それを骨組みにして、その上に黄色く染めた紙を貼る。完成すると金塊のようになる。

紙銭生産が本格的に復活するのは、経済開放を促した1986年のドイモイ政策の後だが、その時にはトイー・ヴァンは復活しなかった。紙幣を模した額面が「5 đồng」(「đồng」(ドン)は現代ベトナムの通貨の単位)の紙銭が登場した。この紙幣を模した紙銭は、現実の紙幣とはデザイン上は何ら関係がない。そして、現在では額面が変わり、その額が高額になって多くの0が並ぶが、同じようなデザインの紙銭が今も生産されている。

このほかに、C氏によると、現在A村で生産されている紙銭には、「vàng lá」(ヴァン・ラー「金箔」)と呼ばれているものがある。これは「金紙」である。赤の地に金色(黄色)を塗る。この金色(黄色)の染料をつくるのに秘密があるらしく、白色と赤色を混ぜて金色(黄色)を作るのがこの村独特の技術だという。今も手作りだが、生産量が多く、収入がいい。C氏によると、漁民が漁に出る前にヴァン・ラーをたくさん燃やすため、タイビン省やゲアン省の沿岸部の漁業関係者がよく購入するという。

前掲の『金銀紙の秘密』には、地の色が赤の金紙は載っていないため、台湾には同種のものはないと思われる。いっぽう筆者が調査した香港では、「金銀紙」は、文字どおり「金紙」と「銀紙」が一緒に束ねられていて、金紙と銀紙の用途の上での区別が希薄であるが、赤地に金色が塗られた金紙をふつうは見かけない。

香港で赤地の金紙が売られているのは、九龍城地区の紙製祭祀用品を扱う店である。この地区は歴史的に潮州人が多く住む場所として知られており、その金紙も潮州人が用いるので「潮州金」と呼ばれて流通している。ベトナムの漁民との関係はまったくわからないが、広東省東部の沿岸部が潮州地方であり、潮州人が漁業と関係が深いということは、偶然かもしれないが興味深い。

4) ベトナム紙銭の生産

C氏はA村で、1972年から1995年まで紙銭印刷用の版木の製作をしていた。

C氏によると、C氏の専門とする彫刻の仕事は、社会主義体制下では禁止の対象であった。それは、偽物の印鑑を作ることができるという理由からであった。当時禁止された職業は、彫刻家の他、写真を撮影するカメラマン、鍵を作る職人、そして印刷屋であったという。いずれも複製技術に関わる職業である。

C氏は、有名なハノイの美術学校を1966年に卒業し、画家となったが、絵を描いて食べていくのはむずかしく、彫刻の仕事をしていた。当時はA村全体が貧しく、農業の収入だけでは食べていくことができなかったため、紙銭の生産は禁止されていたが、内緒で村の全戸が紙銭を作ってい

たという。

A村で版木を作るのはC氏だけで、版木の注文がハイフォンなど遠いところから来たこともあった。なぜ、C氏が版木を作り続けていたのかというと、材質のいい木の版木は、200万から300万枚くらい刷ることが可能であるが、ふつうは100万枚くらい刷ると版木が壊れてしまうため、新しく版木を作る必要があったからだという。

ベトナムでは、経文を刷る版木も含め、木版印刷の版木には柿の木（「gỗ thi」）が使われてきたという。柔らかいため、細かい部分を彫るのに適しており、水にも強く、何度も刷ることができる。C氏は、この柿の木を仕入れるのに、旧市街へ行って専門店から木材を買ったり、郊外を散歩して柿の木を探し、その柿の木を植えている家に直接交渉したりして手に入れたという。

前述した「5ドン札」の紙銭も、C氏が創作した。村人からのアイデアを参考にただけで、手本にするものは何もなく、「5」という数字にも意味はとくにないらしい。しかし、このデザインはとてもよく、かなりたくさん売れたという。

1995年にC氏が版木の彫刻の仕事をやめてから、紙銭生産は、手摺りの版画から機械による大量生産へと時代が変わっていった。C氏によれば、かつては1日に20キログラムの紙を使ったが、今は2トンから3トンほどの量の紙を使い、生産性は100倍も上がった。

そして、どこにもモデルのない「500,000ドン札」（「500,000」は現在の紙銭の額面）の紙銭とは違って、新たに需要の出た「米ドル札」を忠実に模倣した紙銭は、手彫りの版木では作ることができなかった。なお、D女史の説明では、米ドル札の紙銭が登場した1970年代から80年代にかけての時代、当初はC村では米ドル札の紙銭を作ることができず、中国からの輸入品が一時市場に出回ったという（現在はC村でも米ドル札の紙銭が機械で生産されている）。

C氏に手摺り時代の版木が残っていないかと聞くと、当時はまだ電気もなかったような時代なので古い版木は全部マキにして燃やしてしまい、村には1枚も残っていないだろうという。当時、紙銭生産は禁止されていたので、当然のことながら、その作業風景を写した写真も残っていないということであった。

現在A村で見る紙銭の機械印刷は、ゴム印をロール紙に押ししていくような凸版印刷である（写真1）。D女史の話では、大きな機械が導入されたのは、4、5年前からで、版木の時代と印刷機の時代の間、ガリ版刷りの時代があったようだ。D女史の家内工場では、バクニン省からリサイクル紙を調達し、それをA村内の印刷所に印刷を依頼して、印刷されて戻ってきた紙を家で裁断して紙銭を作っている。使用する紙（印刷された紙）は1か月に100万枚で、1枚に紙幣の紙銭が16枚印刷されているから、紙銭が1600万枚作られていることになる。

D女史によると、質の悪いリサイクル紙は、銭型の並んだ黄土色の紙銭にするしか用途がないという。いっぽうで、最近はこのような紙銭もあるとあって、D女史は筆者に、現実のベトナムの紙幣にそっくりで、透明プラスチックの透かしの部分も入った紙銭を見せた。しかし、その後、この紙銭は市中に出回ることがなかった。

筆者がD女史に会ったところの新聞報道によると、ベトナム政府は、現実の紙幣によく似た紙銭を規制する政策を計画していた[Viet Nam News 2011]。この規制の流れのなかで、透かし入りの紙銭は流通が断念されたものと考えられる。その新聞報道によると、政府による草稿では、紙銭の印刷を計画している者は事前に政府に見本を提出しなければならないことになっており、また模造された紙銭は、現実の紙幣よりも3センチ短く、あるいは3センチ長くしなければならず、さらには、片面印刷の単色刷りにしなければならないことになっている。

しかしながら、筆者がその後、実際に市中で目にした紙銭には、紙の質はよくないが本物をコピー

一したと思しき、両面印刷で黒色と緑色の2色刷りの「100米ドル札」にそっくりの紙銭や、両面印刷だが、表面のみカラーの「50ユーロ札」の紙銭などがあった。このユーロ札には、「NGÂN HÀNG ĐỊA PHỦ」（左から右への横書き）というベトナム語や、「歐圓」（左から右への横書き）や「天地通用紙幣」（右から左への横書き）の中国語、さらには小さくて色が薄い、閻魔大王らしき肖像画があり、本物のコピーには全くあたらないが、色合いなどはとてもよく似ている。ドルやユーロは、ベトナムの紙幣ではないため、政府はその複製に対して大きな関心をもってはいないようだ。

D 女史によると、「米ドル札」紙銭の登場する以前の時代には、用紙は古い新聞紙などを使っていて、片面にだけ印刷していたという。近年ベトナム製の立派な紙銭が多く作られるようになった背景には、印刷技術の発達のほかにも、紙のリサイクルの技術が発達し、安価にリサイクル紙が調達できるようになったことが関係している。

5) ベトナム紙銭の流通と消費

A 村で生産された紙銭は、旧市街のハン・マー通りに卸される（写真2）。ハン・マー通りは、文字どおり「マー」（紙製祭祀用品）の販売に特化した通りであり、古写真を見ると、かつてはこの通りに、かなり規模の大きな紙製の象や馬、船などが並べられていたことがわかる [Ho and Phung 2007:82]。しかしながら現在は、紙銭のように信仰行事で燃やされる紙製祭祀用品は、商品としてはそれほど目立たず、結婚式や正月の飾りに用いられるような派手な赤色の紙製品が店先に多く並んでいる。

A 村が生産して卸しているのは、沖縄の「ウチガミ」に似た銭型の並ぶ紙銭（写真3）、「500,000」という額面の紙銭（写真4）、米ドル札を模した紙銭（写真5）、そして赤字に金色の金紙である「ヴァン・ラー」（写真6）の4種類である。例えばE店では、これら4つをビニール袋に詰めてセットにして売っている。なおE店では、銭型の並ぶ紙銭の色違いのものも売られていた。通常は地の色が黄土色であるが、ここには地の色が水色やピンクのものもあった。E店の紙銭は、A村産以外は、すべてバクニン省から仕入れている。近年はバクニン省の製品がハノイで多く売られていて、A村の製品と競合している。工場の労働者を退職して自宅で紙銭の工場を経営するA村のD女史も、都市化したA村では地価が高いため工場を拡張することはできず、現在はこの紙銭作りの仕事に専念しているが、安定した仕事ではないから続けたくないと言っていた。

さらに、ハン・マー通りの専門店には、これらのベトナム製品のほかにも、もっと色とりどりで形の違う様々な紙銭が並んでいる。そのなかにはベトナム語の書いていない中国製品も多い。E店の向かいのF店で聞いたところでは、F店で売る紙銭のうち、セット物以外は中国製だという。F店の人が国境付近まで買い付けに行くのではなく、国境を越えて中国に入って、紙銭を買って来たベトナム人が、この店に卸しに来るといふ。F店の女性店主は2代目で、ここで20年ほど店を開いている。この家族はハナム省出身だが、このハン・マー通りに店を出している人たちには、ハイフォン、フンイェン（省）、ハータイ（今はハノイ市）など、様々な地方の出身者がいるらしい。

ハン・マー通りの専門店は、卸と小売りの両方をしている。ハノイの街のなかでは、2つのザルに線香や紙製祭祀用品を入れて天秤棒で担いで移動し、辻に座って紙銭を売る女性を多く見かける。市民の多くは、特別ではない紙製祭祀用品をハン・マー通りではなく、このような物売りの女性や、市場の小さな商店から買っている。上記の4種類の紙銭のセットの値段は、だいたい5,000ドンから20,000ドンくらい（日本円では20円から80円くらい）である（写真7）。なお、紙銭ではなく「紙紮」であるが、これを山盛りに入れた2つのザルとそれを渡した天秤棒が、ハノイにある「ベトナム女性博物館」の常設展示にあり、女性が従事する代表的なスモール・ビジネスの表象

として用いられている。

また、ベトナム女性博物館の常設展示には、出産に関係した人生儀礼として、「コン・ム (cung mu)」(産婆さんへのお供え) という新生児の満1か月の祝いに関する展示もある。これは、家庭に祭壇を設け、1人の天上の聖母と12人の産婆の女神への供え物をそれぞれ用意する行事である。展示されているのは、その供物であるが、13人の女神には、それぞれ緑色の紙製の服があり、その上に、A村の生産する4種類の紙銭がきれいに重ねて折りたたまれて置かれている。この4種類の紙銭のセットが、ハノイでもっともよく用いられている紙銭である。

ハノイ市内の店舗内には、隅に土地神の祠があり、そこに紙銭のセットが置かれていることが多い。これらの紙銭は、旧暦の1日と15日に軒先で燃やされる(写真8)。また、ハノイでは、民間信仰の神を祀る廟や、仏教寺院、各宗族の祠堂などが、旧暦の1日と15日に開放され、参拝する人々は紙銭を香炉で燃やす。この時に使われる紙銭も、4種類の紙銭のセットである。人気のある仏教寺院では、境内に常設された店舗のほか、堂宇内にも物売りの女性が座って紙銭を売っているが、予め4種類を重ねて折って、顧客がセットのまま買って、セットのまま使用できるようにしている場合もある。

もちろん、ハン・マー通りの店にはベトナム製、中国製の様々な種類の紙銭が並んでおり、ハノイに住む人々は自由に自分が燃やす紙銭を選ぶことができる。しかし、筆者が各宗教施設での紙銭の販売と使用の観察から把握できた重要な事実は、ベトナムでは金紙と銀紙の区別が無く、紙銭を捧げる対象が神仏であれ、祠堂に祀られた祖先であれ、「ヴァン・ラー」という金紙を含む4種類の紙銭のセットが、あらゆる場面で使用されているということである。

5. 結論

以上見て来たように、今日のハノイでは、A村で生産されている銭型の紙銭、「500,000」額面の紙銭、米ドル札を模した紙銭、「ヴァン・ラー」という金紙がセットとして汎用されている。

香港の場合と同じく、今では金紙と銀紙の区別はベトナムでは存在しない。しかし、この現象は、おそらく近年のことであろうと思われる。例えば、1910年代から40年代にかけてベトナムに滞在し、ベトナムの民俗を紹介する書物を多数著した水谷乙吉は、ベトナムの祖先祭祀について次のように書いている。

祖先の靈魂は、家の祭壇で食事をなし、線香や焼香を嗅ぎ、家族の運命を支配する。それで命日には、御馳走を供えると共に金紙で金塊を造り、銀紙を供へ、生前に愛好した品物を紙で造り祭壇に供へる。そして線香が燃え盡きると、酒を掛けてこの紙を焚く。するとこの金、銀の紙は天に上り、死界で通用する貨幣となり祖先の懐中へ入り、紙幣は本物になって祖先がこれを使ふと言うのである。

[水谷 1943:225]

ここから、A村がかつて作っていた「トーイ・ヴァン」という金塊の模型とは別に、銀色の紙の「銀紙」がベトナムの祖先祭祀に使われていたことをうかがうことができる。

それでは銀紙はなぜ消えてしまい、金紙がなぜ残ったのか。おそらく、「ヴァン・ラー」という金紙が、ベトナム北部、とくに沿岸部では人気があり、A村もその生産に特化していたため、普及して祖先祭祀にも用いられるようになったのではないか。

もっとも、別の解釈も成り立つであろう。この「ヴァン・ラー」の内側には薄い白い紙や灰色の



写真1 専用の機械で刷られている米ドル札を模した紙銭。
2011年8月、ハノイ、A村にて筆者撮影。



写真2 赤色の縁起物を多く店先に吊るした、ハノイ・旧市街、
ハン・マー通りの紙製祭祀用品店。2012年2月筆者撮影。



写真3 銭型の並ぶベトナムの紙銭。タテ
28 cm ヨコ 23 cm。片面印刷。2011年2月、
ハノイ・ホアイドゥック区にて筆者購入。



写真4 「500,000」の額面のベトナムの紙銭。
タテ 9.5 cm ヨコ 14.5 cm。両面印刷。2011年
2月、ハノイ・ホアイドゥック区にて筆者購
入。



写真5 米ドル札を模したベトナムの紙銭。タテ7 cm ヨコ16 cm。両面印刷。2011年2月、ハノイ・ホアイドゥック区にて筆者購入。

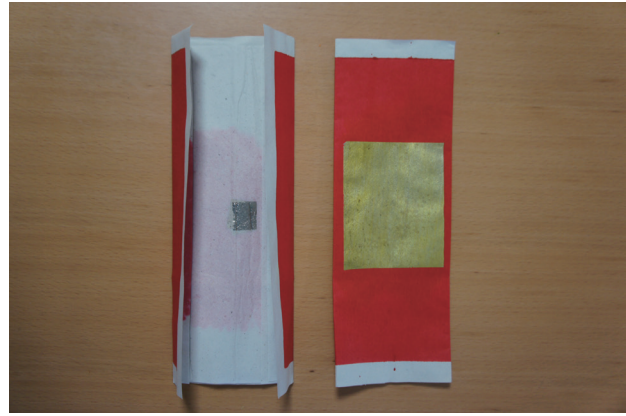


写真6 「ヴァン・ラー」というベトナムの紙銭。タテ23.3 cm ヨコ8 cm (畳んだ状態)。左側は裏返した状態 (小さな銀箔が片面にある)。片面印刷。2011年2月、ハノイ・ホアイドゥック区にて筆者購入。



写真7 ある物売りのザルのなかのベトナム紙銭セット。上のセットの値段は、20,000ドン。下のセットの値段は、5,000ドン。2012年7月、ハノイにて筆者撮影。



写真8 旧暦7月1日に路上で紙銭を燃やす店主。2011年8月、ハノイにて筆者撮影。

紙が重ねられていて、その薄い紙の上に小さな銀箔が貼られているものもある。もしかすると、「ヴァン・ラー」は単なる「金紙」ではなく、香港の「金銀紙」のように、「金紙」に「銀紙」が重ねられた、「銀紙」を含む「金紙」なのかもしれない。

この「ヴァン・ラー」も含め、現在用いられている4種類の紙銭のセットは、絶妙の組み合わせになっている。

まず、「紙銭のなかの紙銭」とも言うべき銭型を並べた紙銭は、質の悪いリサイクル紙を使って印刷されるのにふさわしい製品であり、また伝統文化に保守的な市民にふさわしい商品である。

紙銭産業が停滞した1954年の南北分離後の時代、銭型を打ち付けるだけなら、沖縄の紙銭のように、ハノイでも自家製の紙銭が使われることがあってもよかつたはずである。しかし、沖縄や韓国の場合とは違って、ベトナム紙銭は歴史的に市場経済のなかに深く浸透していたがために、ハノイでは困難な時代でさえも、人々の需要に応じてA村では密かに紙銭が生産され、市場に供給されてきた。

なお、自家製品の紙銭を作るための道具として使えそうな「穴あき銭」もハノイには多くある。ハノイでは、台湾や香港の寺廟で占いの真偽を問うのに使われている半円状の「ポエ」（2つで一对の「筭杯」あるいは「杯筭」）と同じ機能をもつ道具として、2枚の「穴あき銭」が使われている（これを「đông tiền âm dương」（陰陽銅銭）という）。おそらく実際にベトナムや中国で鑄造された「穴あき銭」がふつうに流通していた時代には、本物の「穴あき銭」が寺廟に置かれ、参拝する人々は自由にそれを占いに使っていたのであろう。しかし今やベトナムの古銭も骨董品の価値を帯びるようになったため、占いの道具としての模造品の「穴あき銭」が市場などで売られており、寺廟の祭壇にはそれら模造品が皿の上に載せられて置かれている。

次に、1986年のドイモイ政策以降、ベトナムの経済にとって重要性を増したのは米ドルであるため、米ドルを模した紙銭が、「ユーロ」や「圓」（ここでは必ずしも日本円ではなく、中国元やベトナム・ドンなどを示すための一般的な単位）の紙銭よりも、ベトナム人に人気があることは想像に難くない。人々にとって都合がいいことには、「米ドル札」を忠実に模倣した紙銭を作ったり、売ったりしても、ベトナム政府は米ドルの発行主体ではないため、今のところ何も干渉をしないということである。

そして、米ドルとは対照的に「500,000」の額面の紙銭は、現実の紙幣をモデルとはしていない。ベトナムの国内経済のインフレーションが進むにつれて、「0」が次々に付けられていったが、おそらく、その原型は本稿で紹介したように、A村で一手に版木を作っていたC氏が村人とともに創作した「5」の額面のベトナム・ドンを模した紙銭に由来するのであろう。この人気商品が、その後の時代にも引き継がれていると考えられる。

ベトナム政府が、現実の紙幣に似た紙銭に対して警戒を強めていること背景には、現実にはベトナムの宗教施設において、供物として現金と紙銭が融合して使われているということがある。参拝する人々は、紙銭を供えて燃やすだけではなく、祀られる神格ごとに額面の小さい紙幣を供える。筆者の訪れた、ある寺院では、境内にある紙製祭祀用品を売る店が、紙銭だけではなく、額面の小さい紙幣の束を売っていた。つまり、参拝する人は、この店で供物用の現金を買う（両替する）のである。

また、この寺院では、たまたま「lên đồng（レンドン）」というシャーマニズムの儀礼が行われていた。次々と神が乗りうつり、その神にふさわしい動作が続くなかで（ベトナムのシャーマンは儀礼の中では言葉を発しない）、周りに座る信徒はその神に現金（紙幣）を捧げ、神は祝福して現金を返す（おそらく全額ではなく一部分を引いた額を返していると思われる）。神が紙幣を撒いて、それを取

るのに信徒たちが熱狂するというのもレンドンの儀礼ではあるようだが [Endres 2011:120]、筆者が見た儀礼では、手渡しで信徒に戻された。そして、そこからさらに、遠くから見ていた筆者を含む人々に、「2,000」、「5,000」、「10,000」などの額面の小さい、きれいな紙幣（日本の俗語でいうところの「ピン札」）が配られていた。

このように、現代のベトナム社会において紙銭は、単なる「迷信」でも、燃やされる紙でもなく、現実の宗教と経済に深く根差したものである。ベトナムの紙銭が、歴史的に中国の影響を受けて作られるようになったものであることは間違いないが、その後の歴史の流れのなかで、さまざまな影響をさらに受けて、現在私たちがハノイで見るとかたちへと変化した。

紙銭に様々な種類があり、それぞれの紙銭が個別の社会によって異なる用途で用いられていることは、複数の社会を比較して考えてみることからしかわからない。同じ漢族であっても台湾と香港のあいだで、香港にかぎっても、広府人（広州近辺に祖籍をもつ香港住民の多数派）と潮州人とのあいだでは、用いる紙銭が異なってくる。そして、本稿で見てきたように、ベトナムの事例は東アジアの紙銭を比較するうえでの興味深い材料を提供している。

本稿では残念ながら、筆者のベトナム語能力が不十分なために、ベトナム民俗学の先行研究を十分に取り入れた議論を行うことはできなかった。しかし、ハノイにおける生産、流通、消費の現場に立ち入り、比較の視点をもって考察することで、今まで見えていなかったものが見えてくる可能性を示すことはできたと思われる。今後は本稿をさらに一歩進めるような、東アジアの物質文化の比較研究に取り組みたい。

謝辞

2010年から2012年にかけてのベトナム北部での実地調査においては、Nguyễn Văn Chính 教授（ベトナム国家大学）、Chu Xuân Giao 研究員（ベトナム社会科学文化研究院）、Nguyễn Thị Thu Thủy 女史（ベトナム国家大学）から、多大なご助言、ご協力をいただきました。ここに記して深く感謝いたします。

参考文献

- 大西和彦 1995 「最新・ベトナム『信仰』事情」石井慎二編『別冊宝島WT① ベトナム〈沸騰〉読本』宝島社、218-224頁
- 可見弘明 2004 『民衆道教の周辺』風響社
- 川上崇 2001 「ベトナム社会主義革命のなかの手工芸村：紅河デルタにおける木版印刷業の歴史的展開」『ベトナムの社会と文化』第3号、49-79頁
- 川本邦衛編 2011 『詳解ベトナム語辞典』大修館書店
- 窪徳忠 1997 『増補新訂 沖縄の習俗と信仰』第一書房
- 慧巖法師 2003 『台湾仏教史論文集』高雄：春暉出版社
- 駒澤大学禅文化歴史博物館 2011 『企画展「紙銭の世界」図録 禅文化歴史博物館所蔵道教関係資料1 一紙銭編一』駒澤大学禅文化歴史博物館
- 国立民族学博物館 2012 「標本資料目録データベース」2012年9月27日データ更新、2012年10月14日参照 <http://htq.minpaku.ac.jp/databases/mo/mocat.jsp?HEADER=false>
- 佐藤純子・西川輝昭・西田佐知子・門脇誠二 2010 「名古屋大学博物館所蔵中国紙馬ならびに紙銭のリスト」『名古屋大学博物館報告』第26号、169-184頁
- 澁澤敬三 1992 『澁澤敬三著作集 第1巻 祭魚洞雑録 祭魚洞雑考』平凡社
- 末成道男 1998 『ベトナムの祖先祭祀 潮曲の社会生活』東京大学東洋文化研究所
- 末成道男 2003 「ベトナムの文化交流の諸相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第106集、199-209頁
- 末成道男編 2008 『ベトナム文化人類学文献解題』風響社
- 瀬川昌久 1987 「あの世の財貨 一香港の紙製祭祀用品」『季刊民族学』第39号、94-101頁

- 曾景來 1938 『台湾宗教と迷信陋習』 台北：台湾宗教研究会
- 台湾慣習研究会 1906 「懸賞文募集広告」『台湾慣習記事』第6巻第1号、3頁
- 田所政江 2008 『ベトナム民間版画』 里文出版
- 張益銘 2006 『金銀紙的秘密』 台中：晨星出版
- 陳荊和 1970 「十七世紀に於ける河内（Kê Chợ）の様相と性格について」『史学』第43巻第3号、1-16頁
- 日本大辞典刊行会編 1980 『日本国語大辞典〔縮刷版〕第5巻』 小学館
- 東野治之 2006 「古代東アジアにおける通貨模造品 — 『厭勝錢』研究序説—」、元興寺文化財研究所編『東アジアにおける自然の模倣（造り物）に関する研究』元興寺文化財研究所、24-38頁
- 西川義祐 1906 「金銀紙の種類及び製法」『台湾慣習記事』第6巻第4号、288-298頁
- 藤田捨次郎 1901 「舊稿拾録（三）爆竹と金銀紙」『台湾慣習記事』第1巻第3号、62-64頁
- 水谷乙吉 1943 『安南の宗教』 高山書院
- Do Thien 2007 “Unjust-Death Definition and Burnt Offering: Toward an Integrative View of Popular Religion in Contemporary Southern Vietnam,” Philip Taylor (ed.) *Modernity and Re-enchantment: Religion in Post-revolutionary Vietnam*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 161-193.
- Endres, Kirsten W. 2011 *Performing the Divine: Mediums, Markets and Modernity in Urban Vietnam*, Copenhagen: NIAS Press.
- Fanchette, Sylvie and Nicholas Stedman 2009 *Discovering Craft Villages in Vietnam: Ten itineraries around Ha Noi*, Hanoi: The Gioi.
- Kwon, Heonig 2007 “The Dollarization of Vietnamese Ghost Money,” *Journal of the Royal Anthropological Institute (N.S.)*, Vol. 13, pp. 73-90.
- Luu Duy Dan (ed.) 2010 *The Tourism Craft Villages: Hanoi and the Surrounding Area*, Hanoi: Viet Nam Publishing House of Natural Resources, Environment and Cartography.
- Ho Tham and Phung Thi My (eds.) 2007 *Hanoi's Ancient Features*, Hanoi: VNA Publishing House.
- Nguyen, Thi Hien 2006 “A Bit of a Spirit Favor is Equal to a Load of Mundane Gifts: Votive Paper Offerings of *Len Dong* Rituals in Post-Revolution Vietnam,” Karen Fjelstad and Nguyen Thi Hien (eds.) *Possessed by the Spirits: Mediumship in Contemporary Vietnamese Communities*, Ithaca, NY: Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Viet Nam News 2011 “Votive money-makers barred from printing copycat notes,” *Viet Nam News*, 9 March, 2011.
<http://en.vietnamplus.vn/Home/Votive-money-makers-barred-from-printing-copycat-notes/20113/16582.vnplus>